

二〇二四年一〇月二五日

金継ぎの線なぞりゆく秋思かな  
紅萩をふるはす門の軒しづく  
庄屋門臥龍の松の色変えず  
ゴブランを地に織ることし柿落葉  
草刈機うなる小道を朝散歩  
秋の日を弾く御室の金襖

澄子  
なつき  
ぼんこ  
むべ  
よし女  
せいじ

二〇二四年一〇月二四日

火祭や鞍馬の夜の底燃やす  
渋柿と大き札たつ無人店  
一と匙の粥は新米離乳食  
目葉の一滴 鱗雲 滲む  
秋澄むや染付皿の深き青  
一夜さの風に散り果て柿紅葉

山椒  
康子  
康子  
むべ  
風民  
うつき

二〇二四年一〇月二三日

こぼれ敷く小さき十字花金木犀  
田の神さあ刈田の風に吹かれをり  
朝まだき雲なき空に月高し  
こすもすの風の迷路にあそびけり

あひる  
うつき  
えいじ  
澄子

二〇二四年一〇月二二日

百体の子授け地蔵花野道  
露一つづつが返してある朝日  
猪除けのフェンス甲斐なし夜半の畑  
庭の灯の点れば浮かぶ銀木犀  
小夜時雨間遠となりぬ貨車の音  
彫深き十六羅漢紅葉雨

風民  
うつき  
千鶴  
あひる  
むべ  
なつき

二〇二四年一〇月二一日

払はれし電話ボックス残る虫  
忘れもの取りに来たのか秋の蝶  
読み終へて余韻に浸る夜長かな  
みどり児の眠りに落ちて星月夜  
蟪蛄の鎌にたじろぎ猫パンチ

うつき  
明日香  
むべ  
あひる  
みきお

二〇二四年一〇月二〇日

デイサービス秋思もて乗る送迎車  
雨しづく真緒の糸に珠となり  
宣誓は白寿の母や運動会  
夕日背に豆打つ母の影法師  
刈田はや測量杭の打ち込まる

よし女  
むべ  
あひる  
みきお  
うつき

二〇二四年一〇月一九日

雑踏の中の孤独や秋時雨  
落暉より発したるやに鱗雲  
降り出して雨足白し萩の宮  
秋天下ひたすら歩くニューシューズ  
神木に触るる皺の手秋さぶし

うつき  
せいじ  
なつき  
たかを  
なつき

毎日句会みのる選・二〇二四年一〇月二七日